【熊本S.J.C.D.例会　抄録】

演　題　　**インプラント治療後、早期に隣接歯が近心移動した一症例**

演者名　　**吉永　修**

日　付　　**2009年1月27日**

Keywords

1. インプラント
2. 軟組織の悪習癖
3. ＭＦＴ

抄　録

欠損補綴を行うにあったて、インプラント治療は有効な治療法である。しかし、咬合を構成したからといって、必ずしも生理的に完全に調和させられるとは限らない。現在の歯科治療において、軟組織の機能訓練が一般臨床で取り入れられておらず、治療後も悪習癖をもった軟組織に よる歯牙移動が継続的に起こることもある。改善できない軟組織の習癖に調和できる補綴治療が今後の課題となる。

患者は５１歳の女性で、１９９９年７月、上顎右側のブラッシング時の疼痛を主訴として来院した。習慣性咀嚼側は左側であったが ⌉５６７欠損のため、右側のみで咀嚼していた。初診時の診査において、左側関節円板の内側転位およびコンダイルの運動制限が認められたが、疼痛・違和感はなかった。そこで ⌉５６７にインプラントを植立し、プロビジョナル・レストレーションを装着した。その後、左側顎関節部に疼痛を訴えるようになったので、咬合調整と筋機能訓練を行い、疼痛が消失したので最終補綴を装着した。

術後２年経過した頃より、インプラントと隣在歯に間隙が生じてきた。経年的天然歯の近心移動にしては、期間が短く原因がわからない。臨床的には患者は「インプラント側で食事をしており、快適である」と述べる。咬合の中心もずれておらず中央にある。オクルーザルコンタクトエリアを咬合調整し、現在まで経過観察を行っている。

私はこの原因が舌の悪習癖にあるのではないかと仮説した。この仮説が正しいかは現在のところ検証できていない。今回、この仮説を発表し、皆さんの考えが伺えたら幸いである。

熊本S.J.C.D.事務局